

同志社大学

2018 年度卒業論文

スクールカーストと制服の着こなしの関連

社会学部社会学科

学籍番号：19151018

氏名：河井冬穂

指導教員：立木茂雄

(本文の総文字数：20823 文字)

要旨

論題 スクールカーストと制服の着こなしの関連

学籍番号：19151018

氏名：河井 冬穂

近年、「スクールカースト」という言葉が浸透して久しい。しかし、生徒の生活におけるスクールカーストの実際の存在感と比較して、その研究は十分であるとは言えないのが現状である。本研究では、スクールカーストと深い関連があると考えられる「制服の着こなし」とスクールカーストの関連を、社会学的な理論を用いて明らかにすることである。これによってこれまで理論的な研究が十分されてこなかったスクールカースト研究を一步進めることを目指す。現在大学生である男女8人に高校生時代の生活に関する半構造化インタビューを実施し、そのインタビューデータからスクールカーストと制服の着こなしについての分析を行った。分析にはGoffman (1959) の演劇論的アプローチを用いた。分析の結果、スクールカーストは、「脱学校(的)文化」への適応度と対応した序列であること、そのなかで、生徒は自分の「脱学校(的)文化」への適応度を表す制服の着こなしによって、役割演技と印象操作を行っていることが明らかになった。

キーワード：役割演技、印象操作、脱学校(的)文化

目次

1 序章	1
1.1 研究背景	1
1.2 先行研究	1
1.2.1 演劇論的アプローチ	2
1.2.2 スクールカースト	3
1.2.3 先行研究における課題	6
1.3 目的と意義	6
2 調査方法	6
2.1 調査概要	6
2.2 調査方法	7
3 結果と考察	8
3.1 スクールカーストの実態	8
3.2 スクールカーストを構成する層	10
3.3 スクールカースト内の位置決定要因	18
3.4 スクールカーストと制服の着こなしの関連	19
3.5 演劇論的アプローチによる分析	23
4 結論	24

1 序章

1.1 研究背景

近年「スクールカースト」という概念は広く浸透している。教室内で生徒同士が値踏みしあい、「格付け」という状況を端的に表現した言葉として、現在、この言葉はインターネット上のみならず、実際の生活においても人々の間で違和感なく使われている。また、2006年11月16日の衆議院「青少年問題に関する特別委員会」で教育学者の本田由紀が言及するなど、公的な場でも「スクールカースト」という言葉は用いられるようになっていく。そして、創作作品においても「野ブタ。をプロデュース」（白岩玄, 河出書房新社）や「桐島、部活やめるってよ」（朝井リョウ, 集英社）などスクールカーストそのものが主題となっている作品や、主なテーマではないとしても学校を舞台とした物語にスクールカーストの要素が盛り込まれているものは少なくない。私自身の学校生活を振り返ってみても、クラスメイトや自分自身の教室での位置づけというものは多くの生徒にとって大きな関心事となっていた記憶がある。しかし、学校生活における生徒内でのその存在感に対し、スクールカーストについての研究は決して十分なものであるとはいえない。既存の研究の多くが、「いじめ」研究や発達心理学、教育学などの延長線上にあるものであり、スクールカースト単体を研究の主題に据えたものは少ない。また、スクールカーストを主題としても、社会学的な観点から理論的なアプローチがなされたものはほとんど存在していないのが現状である。

私自身の学校生活をスクールカーストという観点から振り返ってみると、スクールカーストが特に象徴的に表れているものとして、「生徒の外見」があげられる。「スクールカーストと生徒の外見は強く結びついている」という感覚はスクールカーストをテーマとする創作作品にも頻繁に描かれており、多くの生徒に共通するものではないかと考えられる。例えば、第41回（2004年度）文藝賞受賞作品であり、2005年にテレビドラマ化もされた小説「野ブタ。をプロデュース」では、いわゆる「カースト底辺」であるいじめられっ子のクラスメイトを人気者にしようと目論む主人公が、まずその髪型や制服といった容姿を変化させることに取り組む姿が描かれている。

以上のことから本研究では、スクールカーストにおける制服の着こなしを、相互行為の場における「表現」と捉える。そして相互行為の場における表現の側面に焦点を当てた研究を行った社会学者である Goffman(1959)が用いた、人々の相互行為を舞台の上で展開されているドラマであると捉えて観察し記述する研究方法である演劇論的アプローチを用いて、生徒の制服の着こなしとスクールカーストの関連を探っていく。なお、本研究における「制服の着こなし」とは、制服に合わせる髪型やメイク、カバン等の持ち物なども含めて、生徒による学校に通う際の自身の外見のコントロールのことを指す。

1.2 先行研究

本章ではまず Goffman(1959)の演劇論的アプローチについてまとめる。その後スクール

カースト単体を研究テーマとした先行研究である『教室内カースト』（鈴木翔 2012）の内容を中心にスクールカーストについてこれまで研究されてきたことをまとめる。そして、その内容から先行研究における課題を示す。

1.2.1 演劇論的アプローチ

Goffman(1959)は相互行為秩序がいかなる機能のもとで維持されているのかということに注目した。人々の相互行為は、実際に役割を遂行する「行為」と役割を遂行することを示すために演技をする「表現」とに分けられる。Goffman(1959)の演劇論的アプローチはこのふたつのうち「表現」の側面に注目して記述するためのアプローチである。演劇論的アプローチでは相互行為をあたかも舞台の上で繰り広げられるドラマであるかのように記述する。Goffman(1959)は行為を行う人を「パフォーマー」、それにより提示される情報の受け手を「オーディエンス」と呼んだ。実際の舞台ではパフォーマーとオーディエンスは区別されているが、現実においては、人はパフォーマーであると同時にオーディエンスでもある (Goffman 1959)。

以下では、演劇論的アプローチのなかの「役割演技」と「印象操作」および「役割距離」について記述する。

(1) 役割演技と印象操作

人々はコミュニケーションにおいて、「自分が相手にどのように見られているのか」あるいは「相手にどのように見られたいのか」を意識して、それに応じた自己の呈示を行っている。Goffman(1959)は状況に応じて自分の役割を演じることを役割演技、そのようにしてパフォーマーが自分のパフォーマンスをコントロールすることによって、オーディエンスに与える印象を操作することを印象操作と呼ぶ。パフォーマンスにはパターンが2つある。1つ目は、パフォーマンスの行為者自身とその場にいると自覚している人々に抱かせようとしているリアリティを現実そのものだと信じているパターンである。この場合、行為者は自分自身と演じている役割とを同一視している。2つ目は、行為者はその場にいると自覚している人々に抱かせようとしているリアリティに全く欺かれていないパターンである。この場合、行為者は相手を欺いているということになる。しかし、それは自己の利益のためだけではなく、オーディエンスや社会の利益を考えて相手を欺くこともある。つまり、人々はただ自分の都合を良くするためだけに印象操作を行なっているのではなく、舞台の維持、つまりその場の相互行為の秩序を維持するために印象操作を行う場合もあるということである。相互行為に参加している人たちは暗黙の了解でそれが安定的に進行するように求められている。「この状況では誰がどういう役割を果たすべきなのか」という「状況の定義」が参加者に共有されそれぞれが役割演技を行うことで日常生活が成り立つ (Goffman 1959)。

(2) 役割距離

Goffman(1959)の演劇論的アプローチにおいて、人はその場の状況に応じた役割を演じることによって印象操作を行なっているとされる。しかし人は、役割から敢えて距離をとり、そこから離れた別の自分を示そうとする場合がある。この、個人と、演じている役割との乖離を「役割距離」と呼ぶ。役割距離はオーディエンスに隠されている場合ばかりではない。距離自体がオーディエンスに呈示されていることもある。このときパフォーマーは自分が、物事の成り行きに逆らわずついていくが、その情勢に完全に飲み込まれているわけではないということをオーディエンスに示している。このように役割を演じつつ、たんに演じられている自分だけを呈示しているのではなく、それを演じている自分と含めて呈示されているのが、「自己の同時的な多元性」である (Goffman 1959)。

1.2.2 スクールカースト

(1) スクールカーストとは

「スクールカースト」とは、小学生や中高生がクラスメイトを値踏みし、「ランク」付けしていることを指して近年、メディアや教育評論家の間で使われるようになった言葉である。つまり、「スクールカースト」とは、同学年の児童や生徒の間で共有されている「地位の差」と言える。この「スクールカースト」という言葉が最初に紙面に載ることになったのは2007年に出版された教育評論家である森口朗の「いじめの構造」(新潮社)という本の中である。この本の中で、森口は『『いじめモデル』に一層のリアリティを持たせるために(中略)『スクールカースト(クラス内ステイタス)』という概念を導入』していたと述べている。つまり、明らかにならない「いじめの仕組み」を明らかにするために「スクールカースト」という概念を導入したのである。「いじめの構造」においてスクールカーストは、「クラス内のステイタスを表す言葉として、近年若者たち述べてあいだで定着しつつある言葉」(森口,2007)であり、スクールカーストがこれまで語られてきた序列と異なるのは「ステイタスの決定要因が、人気やモテるか否かという点であること」(森口,2007)だとされている。この定義によれば、「スクールカースト」は人気や「モテ」を軸とした序列構造だということである。言い換えればスクールカーストとは、教室の中で自然発生的に形成される「地位」の上下である。しかしその構造は「この要素を持っていれば〇〇軍」と言えるような単純な構造を持っているわけではない。また、学校段階や学年、性別、進学校であるか進路多様校であるかといった違いに目を向ける必要もある。

これまで、スクールカーストが生徒の学校生活に与える影響として次の2点が指摘されている。一点目は、スクールカーストのなかでその地位を下位に置かれた生徒は、クラスメイトから身分の低い存在、つまり目下の存在だと見なされて、いじめの標的になりやすくなるということ、二点目は、たとはいじめにあわなかったとしても、自分に自信をなくし、学校生活への適応に大きな影響を及ぼすということである(鈴木2012)。

(2) 学校に行く意味とその役割および生徒間文化

なぜ学校に行くのか?という問いに対して一番多く聞かれるのは「将来のため」という

ものだろう。このような学校の役割を、教育社会学では「学校の社会的機能」と呼ぶ。この学校の社会的機能を支えているのが、「メリトクラシー」という社会のあり方である。メリトクラシーとはメリット（業績）とクラシー（支配）を組み合わせた言葉であり、業績があるものが高い地位につき、社会を支配しているというあり方である。つまり、将来役に立つだろう能力を身につけて業績を積む場が学校というわけである。しかし、近年この考え方に異議が唱えられた。社会は業績を指標とするメリトクラシーに加え、より様々な情動的な性質の強い能力によって支配されているのではないかという意見である。単なる学力以外のより様々な能力が社会の中で重要視されてきている。そして、学校では将来のために社会が求めるこれらの力を身につけることが求められている。このような能力を身につけられることを「学校の潜在的カリキュラム」と呼ぶ。潜在的であっても顕在的であっても、学校はそこで過ごす児童生徒に「正しさ」を刷り込ませるような特別な力を持つ。

学校で教わる「正しさ」はそこで過ごす生徒の価値や規範にも大きな影響を与える。そして、個人の価値や規範が、学校で過ごす生徒の多くの規範になると、それはやがて「文化」になる。この文化に関する研究は「生徒文化研究」と呼ばれる。1997年に高校生を対象として行われた「興味・関心のあること」を聞いたアンケート（樋田大二郎 2000）によると生徒の文化は学力と深く関連があるとわかる。学校のフォーマルな価値に肯定的な生徒文化である「向学校（的）文化」は成績上位校に多い。いっぽうで学校のフォーマルな価値に否定的な生徒文化である「反学校（的）文化」は専門校に多く見られる。そして「向学校（的）文化」とも「反学校（的）文化」ともいえない文化として「脱学校（的）文化」というものがある。この「脱学校（的）文化」は岩城秀夫・耳塚寛明「現代のエスプリ 195 高校生」（至文堂、1983）の中で紹介され、「学校のフォーマル価値から身を逸らすという点では確かに反学校的であるにせよ、その価値に対する明白な反抗の姿勢をとるわけではなく、その価値を相対化して仲間との交友などを楽しむという文化」（岩城・耳塚 1983）とされている。当時は「反学校（的）文化」と同様、学力が低い生徒が多い高校に多く見られるものとされていた。しかし、1997年の調査から、「脱学校（的）文化」はどのような学校タイプにおいても主要な文化となりつつあることがうかがえる。日本の生徒文化研究では、学校の学力差を背景としてさまざまな文化の形態が存在することを明らかにしてきた。しかし現在、このように学力をもとにして生徒の文化を把握することに対しては異論が出始めている。先述したとおり社会が求める力がメリトクラシーだけでなくよりさまざまなものへと移行しつつあると言われているからである。近年の生徒の文化は、旧来議論されてきた、学校にとって望ましいか・望ましくないかという価値観ではなく、人間関係を基準とした、より複雑でわかりづらい、細分化されたかたちで構成されているのではないかと考えられる（鈴木 2012）。

③ 「スクールカースト」の世界

小学校時と中学・高校時ではスクールカーストの認識が変化する。スクールカーストは、小学校時は個人間の地位の差として認識されるが、中学・高校時はグループ間の地位の差として認識される。そしてその「地位の差」は上位のグループから下位のグループへの関わりが繰り返される場合に顕在化する。その関わりはいじめではないとされ、クラスに笑

いが起こることもある。そしてその関わりは上位、下位のグループの両者が空気を読んで行われる。また、クラスでグループに所属していない生徒は下位のグループからも見下される。

上位のグループは、学校生活を有利に過ごすことができるいっぽう、下位のグループはグループ単位で行動できるときはよいが、全体で行動しなければならないときに思うようにならないことがある。上位のグループにはさまざまな特権が与えると同時にその特権を行使する義務もある。上位のグループには「地位の差」をコントロールする人事権がある。下位のグループから上位のグループへ移動があった生徒にとっては、上位のグループにいることは負担になることがある（鈴木 2012）。

(4) スクールカーストの戦略

スクールカーストで上位に位置づけられている生徒には「にぎやか」「気が強い」「異性の評価が高い」「若者文化へのコミットメントが高い」といった特徴がある。スクールカーストで下位のグループに位置づけられている生徒には特徴がなく、強いていえば「地味」「目立たない」などである。

上位のグループには結束力がありクラスへの影響力もあるため、下位のグループは彼らに恐怖心を抱く。彼らは人気もあり友達も多いように見えるが、必ずしも好かれているわけではないが下位のグループは自分への評価が低くなってしまいうため受け入れざるをえない。ここに「権力」としてのスクールカーストがみえる。

スクールカーストの地位は固定的で努力では変えられず、キャラクターをいきなり変えることも他の生徒から受け入れられる可能性は著しく低いため、生徒たちは諦めざるをえない（鈴木 2012）。

(5) 教師にとってのスクールカースト

児童生徒側が認識しているスクールカーストと教師側が認識しているスクールカーストに大きな違いはない。しかし、教師はスクールカーストを「能力」による序列と捉えている。さらにスクールカーストに対して肯定的な捉え方をしており、そのなかでの地位に関しても努力ややる気で改善可能なものだと認識している（鈴木 2012）。

(6) まとめ

生徒はスクールカーストを「権力」ととらえ、教師は「能力」と捉えている。スクールカーストの上位に位置づく生徒が支持されているように見えるのは、彼らの結束力や影響力を背景として形成される「権力」を恐れていることである。そのため、下位の生徒たちが抱く嫌悪感は表出されることはない。そしてその「権力」が生徒に影響を及ぼすのは、スクールカーストが固定性を持つ仕組みであると把握されているからでもある。しかし教師はスクールカーストの上位に位置づく児童生徒に極めて好意的な印象を持っている。なぜなら、上位に位置づく生徒を積極性があり教室の空気を作っている「能力」の高い

生徒だと認識しているからである。そして、生徒と教師は両者ともスクールカーストの維持に、生徒は消極的な理由から、教師は積極的な理由から、加担しているのである（鈴木2012）。

1.2.3 先行研究における課題

以上のように既存の研究の多くが、「いじめ」研究や、教育学などの延長線上にあるものであり、スクールカースト単体を研究の主題に据えた研究はごく最近になってからされ始めたものであることがわかる。また、スクールカーストを主題とした研究であっても、その内容は内部事情の叙述にとどまっており、社会学的な観点から理論的なアプローチがなされたものはほとんど存在していない。さらに、スクールカーストが生徒に与える影響について多くの描写がされているが、生徒の行動がスクールカーストに与える影響については十分な記述がされていない。この現状を踏まえて本研究では、スクールカーストが生徒に与える影響だけではなく、生徒の行動とスクールカーストの間の相互作用に注目したい。

1.3 目的と意義

本研究の目的は、制服の着こなしに関する生徒の行動と、その行動とスクールカーストとの関連を、社会学的な理論枠組みを用いて明らかにすることである。本研究では複数の大学生に対して高校生活に関するインタビューを行い、その内容の分析からスクールカーストと制服の着こなしの関連を探る。

本研究の意義としては、スクールカースト研究を現状から一歩進めることである。もし生徒自身による制服の着こなしでの印象操作がスクールカーストと関わっているのであれば、これまで生徒の学校生活や人格形成に大きな影響を与えるものとされていながらも、対処については課題が残っているスクールカーストをめぐる教育に新たな糸口を提供できると考える。

2 調査方法

2.1 調査概要

今回のリサーチクエスションは「制服の着こなしとスクールカーストとの関連」である。本調査では、高校生活について、現在大学に通う1回生から4回生の学生8人に30分から1時間程度のインタビューを実施した。制服がある高校に通っていた学生を主にインタビュー対象者としたが、比較のために制服がない、もしくは制服はあったが必ずしもそれを着なくてもよいとされていた高校に通っていた学生にも、それぞれ1人ずつインタビューを行った。通っていた高校の服装や髪型など外見に関する校則、対象者本人や周囲の人間関係および制服の着こなし方がどうであったかということを中心に語ってもらい、その分析データをもとに制服の着こなしとスクールカーストの関連を探った。

2.2 調査方法

調査方法は 2018 年 9 月 18 日から 2018 年 10 月 27 日の期間に、1 対 1 の半構造化インタビューを採用し、一人当たり 30 分から 1 時間程度のインタビューを行った。そのインタビュー内容を文章に書きおこし、分析した。

(1) インタビューの質問内容

構造化部分の質問項目は以下のとおりである。

表 1 構造化部分の質問項目

項目番号	内容
1	性別を教えてください。
2	現在何回生ですか。
3	通っていた高校の都道府県を教えてください。
4	通っていた高校は公立高校でしたか。私立高校でしたか。
5	通っていた高校に制服はありましたか。
6	校則に服装規定はありましたか。
7	先生から服装についてどのような指導がありましたか。

(2) インタビュー対象者

対象者は現在大学に通う 1 回生から 4 回生の学生 8 人とした。インタビュー対象者のプロフィールは以下のようになっている。

表 2 インタビュー対象者のプロフィール

1 人目 A さん 2018 年 9 月 18 日インタビュー実施
・男性 ・現在大学 2 回生 ・愛知県公立高校（共学校）出身 ・制服有り
2 人目 B さん 2018 年 9 月 11 日インタビュー実施
・女性 ・現在大学 4 回生 ・静岡県公立高校（共学校）出身 ・制服有り
3 人目 C さん 2018 年 9 月 23 日インタビュー実施

<ul style="list-style-type: none"> ・女性 ・現在大学4回生 ・兵庫県私立高校（女子校）出身 ・制服有り
4人目 Dさん 2018年9月24日インタビュー実施
<ul style="list-style-type: none"> ・男性 ・現在大学2回生 ・広島県私立高校（男子校・中高一貫）出身 ・制服有り ただし学年が上がるにつれて服装の自由度が増し、高校三年生は私服登校も可能
5人目 Eさん 2018年10月1日インタビュー実施
<ul style="list-style-type: none"> ・女性 ・現在大学2回生 ・京都府私立高校（共学校）出身 ・制服無し 全員私服登校
6人目 Fさん 2018年10月2日インタビュー実施
<ul style="list-style-type: none"> ・女性 ・現在大学3回生 ・兵庫県公立高校（共学校）出身 ・制服有
7人目 Gさん 2018年10月27日インタビュー実施
<ul style="list-style-type: none"> ・女性 ・現在大学2回生 ・奈良県公立高校（共学校）出身 ・制服有
8人目 Hさん 2018年10月27日インタビュー実施
<ul style="list-style-type: none"> ・男性 ・現在大学3回生 ・兵庫県公立高校（共学校）出身 ・制服有

3 結果と考察

3.1 スクールカーストの実態

今回のインタビュー調査の結果は、先行研究で述べられているスクールカーストの実態の大部分の正確さを裏付ける結果となった。

強く感じられたのが、「スクールカースト」という概念がいかに浸透しているかということである。程度の差はあるものの、生徒間に地位の差があったことを示す内容の発言を、

インタビュー対象者8人のうち7人がしていた。先行研究においてもスクールカーストという概念が広く浸透していることが述べられており、私自身の学校生活でも生徒間の地位の差を感じる場面は多かったが、今回のインタビュー調査はそれを裏付ける結果となった。

今回の調査では「スクールカーストはありましたか」といった、直接的な質問をすることは避けてインタビューを行った。「クラスの雰囲気はどうでしたか」や「クラスの友人関係について教えてください」というように、人間関係について聞く際には意識的に広範な質問を投げかけた。しかし、そのような質問に対して対象者のほとんどが、地位の差について触れるかたちで回答した。さらに人間関係について対象者が話す際に、「地位の話題」が冒頭に来ることがほとんどであった。このことから、生徒間に地位の差があるという意識は多くの人が強く持っていることがわかる。また、「スクールカースト」、「カースト」、「ヒエラルキー」、「一軍二軍三軍」などの直接的にスクールカーストの存在を示す単語を使うインタビュー対象者も多く、「スクールカースト」という概念が浸透していることを改めて意識する結果となった。

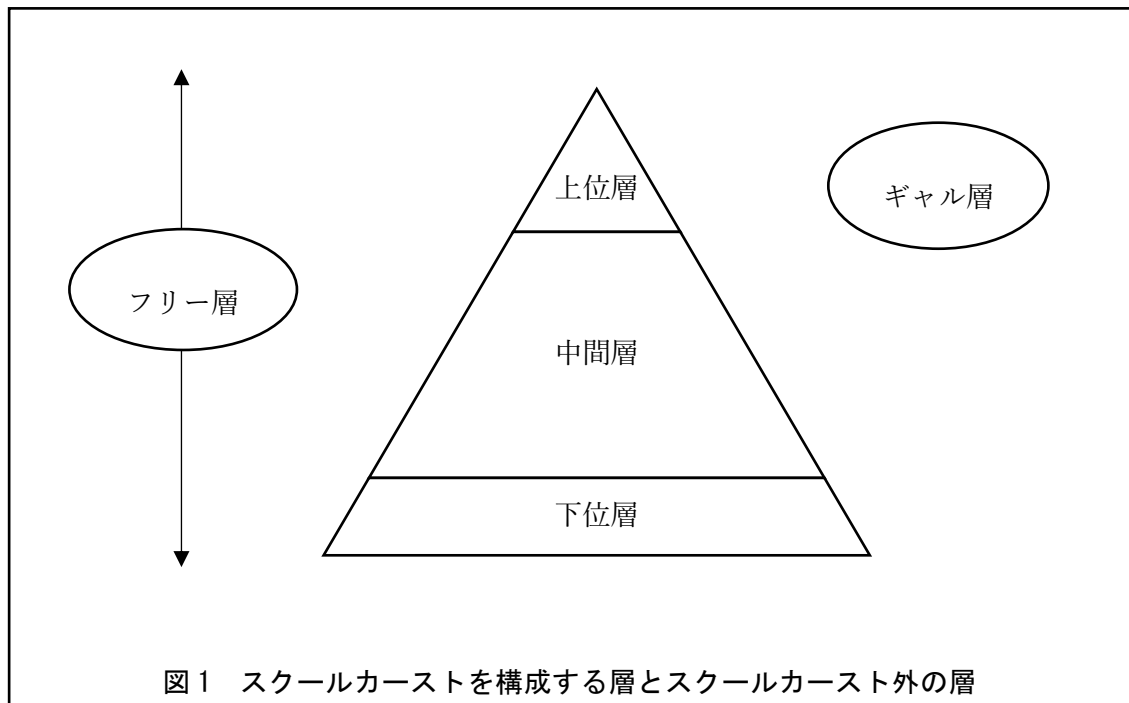
次に、「いじめ」とスクールカーストの関係についてである。スクールカースト研究の多くが「いじめ」研究の延長線上にあるが、スクールカーストといじめは必ずしもセットで存在するわけではないということが先行研究である『教室内カースト』（鈴木翔 2012）内で指摘されている。今回実施したインタビューにおいてもその裏付けとなる発言が得られた。例えば、インタビュー対象者の一人であるAさんはインタビュー内で「いじめとかはなかったんですけど」と前置きしたうえで、「スクールカーストというか、上から一軍、二軍、三軍みたいな、みんな何かしらあるんじゃないかと思えますけどね」と発言している。このような発言からは、いじめが存在していない高校でも、生徒は完全に平等というわけではなく、生徒間にはっきりとした「地位の差」が存在していることがうかがえる。

続いて、『教室内カースト』（鈴木翔 2012）内で指摘されていることとして、「生徒はスクールカーストを『権力』ととらえ、教師は『能力』であると捉えている」（鈴木翔 2012）ということがある。インタビュー対象者が通っていた高校において、教師がスクールカーストをどのように捉えていたかについては今回の調査からははっきりとはわからなかった。しかし、生徒はスクールカーストを権力だと捉えていることについては、インタビュー対象者が「強めな子」「強いキャラクター」といった言葉でスクールカースト上位の生徒を表現していたことなどから裏付けられる結果となった。

スクールカーストが権力の差でありながらもスクールカーストの上位に位置づく生徒が支持されているように見えるのは、下位の生徒が上位の生徒を好意的に捉えているからでは必ずしもなく、下位の生徒たちが上位の生徒に嫌悪感を抱いていたとしてもその嫌悪感は表出されることがないからである。このことは『教室内カースト』（鈴木翔 2012）でも指摘されていた。実際、今回のインタビュー対象であったAさんは、自分はスクールカーストにおいて下位の層であったとしたうえで、上位層の生徒に対しては「嫌悪感しかなかった」（Aさんのインタビュー調査データより）と述べている。さらに、そのような嫌悪感について陰で口にすることはあっても、表立ってということにはなかったということも述べていた。

3.2 スクールカーストを構成する層

以上のように、先行研究の裏付けとなるデータを多く得ることとなった今回のインタビュー調査だが、スクールカーストを構成する層についてインタビューデータから分析したところ、先行研究では触れられていないことについても明らかになった。先行研究である『教室内カースト』（鈴木翔 2012）では、高校におけるスクールカーストについて、グループ間の地位の差であることが述べられ、スクールカーストを構成する層については上位の生徒と下位の生徒が存在することとそれぞれの生徒の特徴が明らかにされていた。しかし、今回のインタビューデータから分析した結果、スクールカーストの構成層は大きく3つに分けられることが明らかになった。さらに、その3つの層には属さない層が存在することもわかった。以上を図に表したものが以下の「図1 スクールカーストの構成」である。



まず、スクールカーストを構成する3つの層について説明する。スクールカーストは大きく分けて3つの層によって構成されている。今回の研究では、カースト内における地位の高い順に【上位層】【中間層】【下位層】と名付けた。中間層に属する生徒の数が最も多く、上位層と下位層に所属する生徒は少数であった。ここで、それぞれの層が持つ特徴について、先行研究より詳しい部分まで明らかにすることを試みたい。まず、インタビューデータからそれぞれの層の行動や性質などに関するキーワードとなる発言を抜粋し、内容ごとに区分した。その上で、それぞれのキーワード群から各層の特徴をまとめた。各キーワードの発言者をキーワード末のカッコ内に示している（敬称略）また、制服の着こなしに関する内容については後述する。

(1) 上位層のキーワード群と特徴

表3 上位層の特徴に関するキーワード群①

リーダー的な存在 (A)
立場的にもそれこそ団長だったりとか何かしらの長をやってる人 (A)
一人ずつ超トップみたいなのがいる. で, まあその仲間たちみたいなのが「一軍」
リーダー的 (C)
クラスの代表のクラス長 (C)
後々サッカー部のキャプテンになるやつ (D)
いじめの首謀者 (D)
学年を牛耳って, 強い (E)
結構中心にいる感じ (F)
会長 (G)
その肩書が既に派手 (G)

このキーワード群からは、『教室内カースト』（鈴木翔 2012）でも述べられているように、上位層は日常の学校生活において生徒の中心・リーダー的存在であることに加えて学校の公的な組織（部活や生徒会など）においても重要な役職についているか、もしくはそのような生徒と密接な関係を築いている生徒であることが読み取れる。

表4 上位層の特徴に関するキーワード群②

口が悪い (E)
笑い声がでかい (E)
いかついつていうか, 気が強い (E)
派手っていうか喋り方 (G)
態度がね. ちょっと大きい (G)
自意識過剰で多分目立ちたがりや (G)
派手なところにいる (G)

このキーワード群からは、『教室内カースト』（鈴木翔 2012）でも述べられているように、上位層は周囲の生徒に「派手」「気が強い」という印象を与える言動をしていることが読み取れる。

表5 上位層の特徴に関するキーワード群③

「67th～」みたいな感じ (B)
明るければ明るいほど, ちょっとグループの名前がついちゃう (G)
仲間意識が強い (G)
群れてることにまず抵抗がない (G)
自分の立場を保証したい (G)

その場を楽しむため (G)
優越感 (G)
他者からの承認を満たして満足, 本当の満足を得てる (G)

このキーワード群からは, 所属する友人グループに名前をつけるなど, 特に女子において上位層の仲間意識の強さがうかがえる. この「上位層の結束力」という点については『教室内カースト』(鈴木翔 2012) においても触れられていたが, その背景には自分の居場所を確保しておきたいという考え方や承認欲求を満たす目的があるということが今回のインタビューでは聞かれた.

表 6 上位層の特徴に関するキーワード群④

のっけから先生をいじってたりとか (A)
先生に対してもすごい, なんていうか, なんか舐めてるじゃないけど, 親しみを込めて「せんせえー」みたいな感じでいったり (C)
真面目ではなかった. 授業時々休んだり (C)
嫌われてた女の先生の陰口 (E)
過度にはみ出す子はそんなになかった (F)
校則をちょっと守ってない (F)
全部守るのはちょっと (G)
勉強はできないですけど, スポーツはできる (A)
D組とE組 (C)
かわいい子 (C)
憧れた (E)
可愛いし (E)
何か持ってる (G)

このキーワード群からは, 上位層は教師との距離は近いが, いわゆる「優等生」ではないことが読み取れる. 勉強ができる, 教師の指導に従う, 規則を守るなどの「学校のフォーマルな価値観」からは外れつつも, 反抗的とまでは言えないと捉えられていることがわかる. 先行研究においても述べられていたように, 教師から好意的に見られつつも, 決して「優等生」的なタイプではないということが上位層の大きな特徴だと考えられる. さらに, 上位層の生徒はスポーツや容姿, 部活での活躍など, ほかの部分で周囲の生徒から高く評価され, 憧れられる要素を持つことがわかった. 「生徒はスクールカーストを『権力』」ととらえ, 教師は『能力』であると捉えている」(鈴木翔 2012) とあるが, 生徒間においても, ある程度は他の生徒から憧れられるような「能力」を持つ者が上位層であるという認識があることが読み取れる.

表 7 上位層の特徴に関するキーワード群⑤

社交的だったりとか (A)

みんなが思ってることを1番最初に言い出す (D)
できるだけ明るくてノリが良くて楽しめそう (G)
モテました (A)
男の子とすごい仲が良い (E)
恋愛経験豊富 (F)
みんなから人気者になりたい
悪口とかもめごとが嫌

このキーワード群からは、上位層はコミュニケーション能力が高く、異性との関係を築くことにも積極的であることがわかる。インタビュー対象者のひとりであるGさんは、自身を上位層だったとしたうえで、上位層の生徒は他の生徒からの人気を得たいと思っており、他の層との争いは好まなかったということ述べていた。

表8 上位層の特徴に関するキーワード群⑥

そういう人は高校入った瞬間から (A)
中一でけっこう発言力のある感じの子が見えてきたなあみたいな (C)
クラスの中心になろうとしてなる人あんまない (D)
中学の頃から (E)
上の子はいけるけど下からなんやろ、下ってそういう人じゃないんですけど、目立つカーストがあったとしたら、あまり目立たない子が後からびよこつと入ると、入るのはちょっと難しい (G)
最初に明るい方と所属してないと明るい方にはいるのはちょっと難しい (G)

このキーワード群からは、上位層は高校入学時には固定化されていることがわかる。この点については『教室内カースト』（鈴木翔 2012）でも指摘されている。中高一貫校に通っていた生徒からは「カースト上位者が決まるのは中学」という内容の発言もあった。

表9 上位層の特徴に関するキーワード群⑦

人に聞こえるように自分の意見を言う (B)
発言力のある感じ (C)

このキーワード群からは、上位層は積極的に自分の意見を言うことが出来、それを周囲に受け入れてもらいやすいことがうかがえる。

表10 上位層の特徴に関するキーワード群⑧

バスケ部 (C)
バスケットボールとバレーボール部において (E)
女バスとかダンスとか入ってる子 (G)
女が入る部活の中では1番花形やった女バス (G)

水球部 (G)
ダンス部 (G)
軽音 (G)
何部に入ってるって事は絶対に派手 (G)

このキーワード群からは、上位層の所属する部活に特徴がみられる高校もあることがうかがえる。特に女子バスケットボール部に上位層が所属しているというケースが多く見られた。

(2) 中間層のキーワード群と特徴

表 11 中間層の特徴に関するキーワード群①

そのひとたちとヨっ友ぐらいついていうか、喋りはする (A)
67th の子たちの一人にフォークソング部がおってん。そのフォークソング部の子たちの周りにいるグループ (C)
バスケ部の 67th の子もおったから、バスケ部 (C)
ちょっと憧れた (F)
すごい (F)
ちょっと憧れた (F)
そういう子に憧れてる子は多かった (F)

このキーワード群からは、中間層はカースト上位層の生徒と密接な関係があるというわけではないが、交流はあり関係も良好であることがうかがえる。さらに、カースト上位層に対し、憧れをもつ生徒もいることが明らかになった。このことから、先行研究では「スクールカーストの上位に位置づく生徒が支持されているように見えるのは、彼らの結束力や影響力を背景として形成される『権力』を恐れてのことである」(鈴木翔 2012) と述べられているが、必ずしもそれだけではないことがわかる。中間層のなかには上位層に対して憧れを持っている生徒もおり、「権力」への恐れ以外の感情もスクールカーストの維持に役立っていると考えられる。

表 12 中間層の特徴に関するキーワード群②

文系の関関同立目指す子とか東京の大学目指す子 (C)
先生に気に入られてた (F)

このキーワード群からは、中間層の学力は平均以上であることが多く、教師から特に気に入られていたという生徒もいることがわかる。教師から好意的に見られているという点では上位層と共通しているが、「勉強ができる」といった「学校のフォーマルな価値」に相当する要素に対しての評価であることが上位層との違いである。

(3) 下位層のキーワード群と特徴

表 13 下位層の特徴に関するキーワード群①

関わりたくないなと思ってました. そこにあわよくば行きたいみたいなのもなかった (A)
その三軍のコミュニティで楽しんでる (A)
俯瞰している感じ (A)
スクールカーストについて陰でなんか言ってる (A)
自分たちで楽しむ (C)
オタク (C)
隅で本読んでるような子 (D)
何とも思ってなかった (F)
しゃべれるけどクラスでは仲良くしたくない (F)
話す内容が違う (F)
なんかあんまりノリが合わない (F)
ちょっと変わってる子 (G)
そこにも入れへん子 (G)
浮いたやつ (D)

このキーワード群からは、下位層は、他の層とは日常生活での交流がなく、同じカーストの生徒とのみ、または一人で過ごすことが多いこと、さらに他のカーストの生徒からは異質な存在と見られていることがわかる。インタビュー対象者のひとりであり、自身を下位層であったと語る A さんは、下位層に属する生徒自身は上位の生徒への憧れはなく、嫌悪感を抱いていたと語っている。先行研究で述べられていた、「スクールカーストの上位に位置づく生徒が支持されているように見えるのは、彼らの結束力や影響力を背景として形成される『権力』を恐れてのことである」(鈴木翔 2012) というスクールカーストの性質は、下位層の上位層に対して抱く感情に特に強く表れていると言える。

表 14 下位層の特徴に関するキーワード群②

ルールを破るのかわっこいいと思ってる人ダサイと思ってた (A)
理系の頭いい (C)
校則通りに (F)

このキーワード群からは、下位層は「学校のフォーマルな価値」に沿った価値規範を持った層であることが読み取れる。

表 15 下位層の特徴に関するキーワード群③

思っても伝えない子 (B)
ちょっとコミュニケーション苦手 (C)
うるさいやつ (D)

優しすぎるやつ (D)

このキーワード群からは、『教室内カースト』（鈴木翔 2012）でも述べられていたように、下位層は発言力がない、気が弱いと見られていることが読み取れる。

以上が、インタビューデータから分析した上位層、中間層、下位層の特徴である。さらに、今回のインタビュー調査では、スクールカーストにおいて上記の3つの層のどれにも属さない生徒が存在するケースがあることがわかった。カーストに属していない生徒には二つのタイプが見られた。1 つめのタイプはカースト内の特定のグループに属しているわけではないが、どの層の生徒とも交流があり、グループにとらわれない友人関係を築いている層である。この層に属する生徒には上位層・中間層に属する生徒との共通点もあるが、特定のグループへの帰属意識がないという点が大きな違いである。今回の研究ではこの層を【フリー層】と名付けた。これは、先行研究では明らかにされていなかった部分である。先行研究においては「クラスでグループに所属していない生徒は下位のグループからも見下される」（鈴木翔 2012）とされていた。しかし、フリー層のようにグループに属してなくても周囲の生徒と良好な関係を築き、どの層にも友人がいるという生徒が存在している場合があることが今回の調査で明らかになった。

2 つめのタイプは、カースト内のどの層からも異質な存在として扱われ、他のグループとの争いも多い層である。このタイプは周囲に対して攻撃的な言動をとることが多かった。『教室内カースト』（鈴木翔 2012）ではこの層も「上位グループ」に含めていたが、様々な層の生徒との衝突をおこしていたり、他の生徒から頻繁に陰口をいわれていたという点から、上位層とは分けて捉える必要があると考えた。今回の研究ではこの層を、インタビュー対象者の発言から引用し、【ギャル層】と名付けた。フリー層とギャル層についても、スクールカーストの3つの層と同様にキーワード群を区分し、特徴を整理した。

(4) フリー層のキーワード群と特徴

表 16 フリー層の特徴に関するキーワード群①

どっちかにいるって感覚はあまりなかった (B)
どっちにも友達はいた (B)
それに満足してた (B)
カーストどこにでもいけますよ (D)
派手な子からも人気やし私みたいな普通の子ともめっちゃ仲いい (E)

このキーワード群からは、フリー層の最大の特徴である、特定のグループへの帰属意識を持たずグループにとらわれない交友関係を持つという性質が読み取れる。

表 17 フリー層の特徴に関するキーワード群②

文武両道でめっちゃストイック (E)
面白い子 (E)

このキーワード群からは、フリー層の生徒は文武両道であったり、面白かったりと周囲から高く評価される要素を持っていることが読み取れる。先行研究では、このような性質を持つ生徒は上位グループにいとされていたが、上位層になりうる要素を持ちながらも特定のグループに属することはない生徒がフリー層になると考えられる。

(5) ギャル層のキーワード群と特徴

表 18 ギャル層の特徴に関するキーワード群①

人からの人気じゃなくて (G)
5人でギャルしようぜ (G)
悪口言われる (G)
他のグループともめたり (G)

このキーワード群からは、ギャル層はグループ外の生徒からの印象には関心がなく、グループ内での盛り上りを重視することが読み取れる。そのため、悪口を言われる、もめるなど他グループとの対立につながることもある。

表 19 ギャル層の特徴に関するキーワード群②

部活やってない (G)
遊ぶ事 (G)

このキーワード群からは、ギャル層は学校のオフィシャルな活動より、学校外で楽しむことを求める。学校内での人間関係を重視し、学校の公的な組織でも高い地位についていた上位層とは対照的な部分である。

表 20 ギャル層の特徴に関するキーワード群③

男とっかえひっかえ (G)
男関係でもめる (G)

このキーワード群からは、ギャル層は異性との関係が他の生徒に比べて派手であることが読み取れる。上位層も異性との関係性を積極的に築くが、それについて上位層は「モテ」という言葉で表現されているのに対してギャル層は「とっかえひっかえ」という言葉で表現されており、悪い印象を持たれていることがわかる。

以上が、インタビューから得られた、スクールカーストにおける各層の特徴である。さらに、インタビュー対象者の自己認識として自分がどの層に属すると感じていたかを以下の表にまとめた。

表 21 インタビュー対象者のスクールカーストにおける位置づけ

上位層	Gさん
中間層	Cさん, Eさん, Fさん

下位層	Aさん
フリー層	Bさん, Dさん
ギャル層	なし

3.3 スクールカースト内の位置決定要因

前節では、スクールカーストは【上位層】【中間層】【下位層】と分けられる3つの層によって構成されており、さらに【フリー層】【ギャル層】と名付け、スクールカーストに属さない2つの層も存在することを、それぞれの層の特徴と共に明らかにした。ここで、前節で明らかにしたそれぞれの層の特徴から、生徒がどの層に属するかを決める要因は何かということについて考察する。

インタビュー調査で明らかになったそれぞれの特徴を踏まえたうえで、それぞれの層の「規範意識」に目を向けてみると、スクールカースト内の位置と強い関連があることがわかった。

上位層について、中間層、下位層と比較したとき「ルールや学力など、学校の求める価値規範から外れている度合いが強い」ということがわかる。しかし、決して反抗的とまでは捉えられていない。この、「反抗的とまでは言えない程度に学校の価値規範から身をそらす」という上位層の特徴は、先行研究において述べられていた、「学校のフォーマル価値から身を逸らすという点では確かに反学校的であるにせよ、その価値に対する明白な反抗の姿勢をとるわけではなく、その価値を相対化して仲間との交友などを楽しむという文化」（岩城秀夫・耳塚寛明 1983）である「脱学校（的）文化」への適応度が高いことを示していると考えられる。上位層は「脱学校（的）文化」への適応度が最も高いことがわかる。

中間層は、表 12 から、上位層と比較すると、教師に気に入られている自己像を維持しようとしたり、学力が上位層より高かったりと、やや向学校的（＝優等生的）な傾向が見られる。しかし、表 11 から上位層と仲が良かったり、内心では上位層に憧れたりするなど「脱学校（的）文化」の価値規範に対して比較的肯定的な価値規範も持ち合わせていると言える。

下位層は「脱学校（的）文化」に対して批判的な姿勢を見せており、「脱学校（的）文化」の価値規範とは異なる価値観を持つ。さらに下位層は「脱学校（的）文化」の価値規範に対しては否定的な傾向がある。今回のインタビュー対象者の1人であるAさんは、「嫌悪感しかなかった」というような強い言葉で上位層の「学校のフォーマルな価値」から外れた姿勢を批判しており、上位層に対して中間層とは明らかに違う感情を持っていたことがうかがえる。さらに、表 14 には、下位層は学校のフォーマルな価値に比較的順応しているという特徴も表れている。

以上から、スクールカースト内での地位が高くなればなるほど、過度に反抗的とまでは見なされない度合いまでは学校が求める価値規範から外れてゆく傾向があることがわかる。学校のフォーマルな価値規範に対してどのような姿勢をとるかということがスクールカーストにおける地位を決定しており、「脱学校（的）文化」への適応度が高ければ上位層に、低ければ下位層に位置づけられると考えられる。

スクールカーストに属さないギャル層とフリー層についても規範意識という点から検

討する。ギャル層は周囲とのもめごとを起こす、部活動に参加しないなど、「脱学校（的）文化」というより、「反学校（的）文化」に近い価値規範を持っていたと考えられる。フリー層に関しては、その規範意識を明確に示す回答が今回のインタビュー調査では得られなかった。

3.4 スクールカーストと制服の着こなしの関連

今回の調査から、学校のフォーマルな価値規範に対してどのような姿勢をとるかということがスクールカーストにおける地位を決定しており、「脱学校（的）文化」への適応度が高ければ上位層に、低ければ下位層に位置づけられるということがわかった。この、「スクールカースト上位層ほど『脱学校（的）文化』への適応度が高い」という傾向は制服の着こなしについても同様に見られることがわかった。

スクールカーストと制服の着こなしの関連を分析するにあたって、まずはスクールカーストにおいて各層がそれぞれどのような制服の着こなしをしていたかについて分析した。通っていた高校にスクールカーストが存在していたというインタビュー対象者7人のうち、Aさん、Bさん、Cさん、Fさん、Gさんの5人へのインタビューでは所属する層ごとに制服の着こなし方が何らかの点で共通していたことを示す発言があった。一方でDさん、Eさんへのインタビューでは、スクールカーストと制服の着こなしに関連はなかったという発言があった。まずAさん、Bさん、Cさん、Fさん、Gさんの5人のインタビューデータから、上位層、中間層、下位層についてそれぞれの層の制服の着こなし方に関するキーワードとなる部分を抜粋し、区分して以下にまとめた。

(1) 上位層のキーワード群と特徴

表 21 上位層の制服の着こなしに関するキーワード群①

服着崩してたり (A)
髪遊ばせてたり (A)
化粧してきたり (A)
着崩す (A)
色が派手 (B)
推奨されている着方はある。それから外れている (B)
外れた格好 (B)
違反カーディガン着て来たり、化粧とかする感じの子 (C)
ポシェットとかつけてくる (C)
割と着崩す (C)
高校生から髪の毛かきあげる (F)
めっちゃつやつやのこういう巻いてすごい、おおっみたい (F)
第1開けてた (G)
崩してる (G)

このキーワード群からは、上位層の制服の着こなしは派手で目立つという印象を周囲の生徒に与えており、「化粧」「着崩す」「違反」など、学校の服装規定から外れた制服の着こなしを行っていることが読み取れる

表 22 上位層の制服の着こなしに関するキーワード群②

怒られながらも (A)
怒られた (B)
言われてもなおらない (F)

このキーワード群からは、上位層は上記のような制服の着こなしについて教師から注意されることもあるものの、注意をされても制服の着こなしを変えることはないことが読み取れる。しかし、今回のインタビュー対象者のひとりである F さんによると、一斉に服装検査が行われる日や、特に厳しい教師の前など、状況によっては上位層も規則通りの着こなしを行い、そのような状況が過ぎると元の崩した着こなしに戻すという行動が見られたということがわかった。次の表 23 のキーワード群から読み取れる分析とも関連しているが、上位層の制服の着こなしをめぐる行動からは規範から外れつつも過度な逸脱は避けようという意識がうかがえる。

表 23 上位層の制服の着こなしに関するキーワード群③

ぎりぎりをついていこうとする (A)
過度にはみ出す子はそんなになかった (F)
微妙なところちゃんとついていける (G)

このキーワード群からは、表 22 のキーワード群で示したように、上位層の着こなしは教師から注意を受けることがあるものの、反抗的という印象を与えるほど激しく着崩すことはないように意識していることが読み取れる。

(2) 中間層のキーワード群と特徴

表 24 中間層の制服の着こなしに関するキーワード群①

割と普通に着てた (C)
ほぼ着崩してなかった (C)
服装はまあ普通 (C)
とりあえずストレートでちょっと内側クリンとしてた (F)

このキーワード群からは、中間層の制服の着こなしにおける着崩しの度合いは弱いことが読み取れる。「普通」という言葉が用いられることが多く、ほぼ校則通りの着こなしを行う生徒が多い。

表 25 中間層の制服の着こなしに関するキーワード群②

ちょっと着崩したがってる (A)
違反カーディガンは着てたけど (C)
前髪は伸ばしてました (F)

このキーワード群からは、表 24 で示したように中間層は校則から外れた着こなしをあまりしないものの、着崩したいという気持ちは持っており、実際に上位層ほどではない度合いでの着崩しを行っていたことが読み取れる。

表 26 中間層の制服の着こなしに関するキーワード群③

通学中みられてもいい感じに (C)
清潔に着よ (C)
清楚系 (G)

このキーワード群からは、中間層には派手であることや目立つことよりも、好感度の高い着こなしを重視する意識があったことが読み取れる。

表 27 中間層の制服の着こなしに関するキーワード群④

ちょっとここまではキャピレへん (F)
ちょっとチキって、ちょっと下に行く (F)

自身は中間層であったというインタビュー対象者が、自らの制服を着崩す度合いについて語った際、上位層を意識した発言も出た。上位層と比較したときに、意識的にそれ以上の着崩しをしないようにしていたという。

(3) 下位層のキーワード群と特徴

表 28 下位層の制服の着こなしに関するキーワード群①

全然着崩してなかった (A)
守ってる感じ (B)
校則通り (C)
服装とかにこだわらない (F)

このキーワード群からは、下位層は制服の着崩しは全く行わず、校則通りの着こなしを行っていたことが読み取れる。

各層の制服の着こなし方を表すキーワードをまとめた結果、スクールカースト内での地位が高いほうが、学校が求める服装規範からより外れた着方をしている、つまり着崩しているという傾向があることがわかった。逆に、スクールカースト内での地位が下がるにつれ、制服の着方は学校の服装規範に沿ったものになる傾向がある。しかし、上位層の着こ

なしは、インタビュー対象者の「ぎりぎりをついていく」といった発言からもうかがえるように、学校の服装規範から外れてはいるものの、「反抗的」とまでは言えないことがわかる。

ギャル層が存在したというGさんの高校ではギャル層が最も着崩していたという。またフリー層の着こなしについてはBさんからしか回答が得られなかったが、フリー層であったBさん自身、制服を着崩すということに興味はなく、「校則通り着ていた」ということだった。

以上から、制服の着こなしは、(1)スクールカースト内での地位が高くなればなるほど、一定の度合いまでは学校が求める価値規範から外れてゆく傾向があり、(2)その一方で学校が求める価値規範に対して過度に反抗的である着こなしは、カーストから外れた「ギャル層」にのみ見られる、ということがわかる。このことから、制服の着こなしには、その生徒の持つ価値規範、ひいてはスクールカースト内での位置を決める主要な要素とみられる「脱学校(的)文化」への適応度が表現されているのではないかと考えられる。さらに、生徒が他の生徒のスクールカースト内における地位を判断する際に、制服の着こなしを判断材料のひとつとしていたことが、インタビュー対象者の発言によって示されている。

【Aさんのインタビューデータより】

**⁽¹⁾：周りの人はその(制服を着崩す)人たちをどうとらえていた？

Aさん：こいつらは上だなっていうのはありますよ、普通に。

**：それはどうしてだと思っ？

Aさん：服着崩してたりだとか、髪遊ばせてたりとか、見た目で「あ、上の人だな」ってわかるんじゃないかな。僕は全然着崩してなかったです。

【Bさんのインタビューデータより】

**：その(カーストの)判断基準は？

Bさん：色が派手な子？制服以外で身に着けているものの。髪型とか、制服の着方も。学校の規定が厳しくなかったとはいえ推奨されている着方はある。それから外れている子は「ああそうなのかな」ってなるよね(中略)なんか、なんでかはわかんないけど、そういう着方をしてる子のほうがイケてる、みたいな感覚がちょっとあったかもしれない。で、そういうグループの人間ですよ、って見せるための感覚だった子が、大きいっていうか、そっちのほうが先っていうか、そういうなんかこう規定から外れた着方をすることがほんとに自分の美的センスにかなってるかどうかを考えるとこまでをしてないかなって思ってたから。

【Fさんのインタビューデータより】

**：なんでそれ(制服の着崩し)をしてない子がヒエラルキーが下だったと思う？

Fさん：それしてないことををみんながダサイと思ってる。

このことから、制服の着こなしは単純なファッションセンスの表れではなく、スクールカースト内の地位と強く結びついたものであることを、制服の着こなしを行う生徒自身も意

識している場合があることがわかる。

3.5 演劇論的アプローチによる分析

スクールカーストと制服の着こなしとの間にみられる関連を、Goffman(1959)の演劇論的アプローチを用いて説明することを試みたい。Goffman(1959)の演劇論的アプローチによると、人々はコミュニケーションにおいて、「自分が相手にどのように見られているのか」あるいは「相手にどのように見られたいのか」を意識して、それに応じた自己の呈示を行っている。そして、状況に応じて自分の役割を演じることを役割演技、そのようにしてパフォーマーが自分のパフォーマンスをコントロールすることによって、オーディエンスに与える印象を操作することを印象操作と呼ぶ (Goffman 1959)

生徒は、「脱学校(的)文化」への適応度による序列であるスクールカーストにおいて、「自分が相手にどのように見られているのか」あるいは「相手にどのように見られたいのか」を意識しており、それに応じて、制服の着こなしに「脱学校(的)文化」への適応度を表現することによって、自己を呈示しているのではないか。つまり、制服の着こなしは、スクールカーストにおける印象操作の手段のひとつになっているのではないだろうか。ここで、インタビュー内で語られた、あるエピソードを以下に示す。

【Aさんのインタビューデータより】

Aさん：三年でクラスがわかれたんですよ。文系理系と国公立目指す人・私立目指す人と。だから分かれて、私立文系目指す人のクラスに着崩すタイプの人がガッと集まったんですよ。それでその国立に取り残された人たちがちょっと着崩したがってるなっていうのはありました。いなくなったからみたい。私立文系がスッと移動して空きができたんで。そこで着崩します。まあ女子に多かったですけど(目の下を指しながら)急に文化祭でラメつけだす、みたいな人いましたよ。「お前そんなんじゃないか」みただろ」みたいな。クラス分かれてから現れたかもしんないっすね。

Aさんの語った上記のエピソードは、生徒が制服の着こなしによって状況に応じた役割演技を行っていることを象徴的に示している。先行研究において、一度カーストが固定すると、上位層に入りたいと思っても入るのは難しいということが述べられている。また、表6から同様のことがインタビュー対象者の発言でも示されていることがわかる。そのため、スクールカーストにおける地位が自分より上のものがクラス内にいる場合、その生徒以上に制服の着崩しをすることはなく多くのインタビュー対象者から語られていた。このことは以下の「立場わかってる感」というAさんの言葉に特に象徴的に表れている。

【Aさんのインタビューデータより】

**：あなたの目にクラスの人間関係というのはどのように映っていた？

Aさん：男女で一人ずつ超トップみたいなのがいる。で、まあその仲間たちみたいなのが「一軍」って感じでした。でまあそのひとたちとヨッ友ぐらいついていうか、しゃべりはするみたいなのがいるんで、もう完全に一軍二軍、まあ、一軍とは離れて、その

三軍のコミュニティで楽しんでいるみたいなのが三軍みたいな感じでした。失敗してなくなってやつはなかったですね。だからこそ「あいつのくせに髪遊ばせてるよ」みたいなのがなかったのかもしれないけど。みんな自分の立場わかってる感。

しかし、進路別にクラスが振り分けられて周囲の状況が変化し、スクールカースト内での自分の地位が上昇したと認識した結果、この女子生徒たちの役割意識に変化が生じ、これまでは上位層が行っていたような着こなしをするようになったのだと考えられる。

今回の研究で、スクールカーストは、「脱学校（的）文化」への適応度と対応した序列であること、そのなかで、生徒は自分の「脱学校（的）文化」への適応度を表す制服の着こなしによって、役割演技と印象操作を行っていることがわかった。

DさんとEさんのケースのように制服の着こなしとスクールカーストに関連がないケースもあった。この違いの要因は何であるのかについても考えてみたい。先述したように、スクールカーストは、「脱学校（的）文化」への適応度が高い生徒ほど上位に位置する序列である。「脱学校（的）文化」は「学校のフォーマル価値から身を逸らすという点では確かに反学校的であるにせよ、その価値に対する明白な反抗の姿勢をとるわけではなく、その価値を相対化して仲間との交友などを楽しむという文化」とされている。つまり、「脱学校（的）文化」の形成は、「学校のフォーマルな価値」が提示されていることが前提になる。

制服の着こなしも同様である。制服の着こなしが「脱学校（的）文化」への適応度を表すものとなるためには、制服の着こなしに関して、校則の服装規定や教師の指導などの「学校のフォーマルな価値」が存在していることが必要となる。制服の着こなしに関する「学校のフォーマルな価値」に着目すると、スクールカーストと制服の着こなしに関連があったと答えたインタビュー対象者の通っていた高校では、制服の着こなしに関して、「校則」や「教師からの指導」など、学校から何らかの「フォーマルな価値」が提示されていたことが明らかになった。「先生は緩かった」と答えたインタビュー対象者もいたが、制服の着こなしに関する校則は存在しており、一部ではあるが厳しく指導する教師も存在していたという。一方で制服の着こなしとスクールカーストに関連が見られなかったと答えたインタビュー対象者の高校では、制服の着こなしに関して学校から「フォーマルな価値」が一切示されていなかったことがわかった。DさんとEさんの高校では私服登校が可能であり、そこで着る私服についても特に制限はなかったという。実際、Dさんはパジャマで登校することもあり、それについて特に注意も受けなかったと語っていた。制服の着こなしに関して学校から「フォーマルな価値」が示されていないため、生徒は制服の着こなしによって「学校のフォーマルな価値」への姿勢を表すことが出来ない。これがDさんとEさんのケースでは制服の着こなしとスクールカーストに関連が見られなかった理由であると考えられる。

4 結論

最後に、本稿で明らかになったことについてまとめ、本研究の課題と今後について述べる。

本研究では、スクールカーストと深い関連があると考えられる「制服の着こなし」と

スクールカーストの関連を、社会学的な理論を用いて明らかにすることにより、これまで理論的な研究が十分されてこなかったスクールカースト研究を一步進めることを目指した。現在大学生である男女8人に、高校生時代の生活に関する半構造化インタビューを実施し、そのインタビューデータからスクールカーストと制服の着こなしの関連についての分析を行った。分析には Goffman (1959) の演劇論的アプローチを用いた。

まず、スクールカーストに属する層は大きく【上位層】、【中位層】、【下位層】の3つに分けられることがわかった。さらに、先行研究では示されていなかった、スクールカーストに属さない層の存在も明らかになった。

分析の結果、学校のフォーマルな価値規範に対してどのような姿勢をとるかということがスクールカーストにおける地位を決定しており、「学校のフォーマル価値から身を逸らすという点では確かに反学校的であるにせよ、その価値に対する明白な反抗の姿勢をとるわけではなく、その価値を相対化して仲間との交友などを楽しむという文化」(岩城・耳塚 1983) である「脱学校(的)文化」への適応度が高ければ上位層に、低ければ下位層に位置づけられるということがわかった。そのような状況の中で、生徒は自分の「脱学校(的)文化」への適応度を表す制服の着こなしによって、役割演技と印象操作を行っていることが明らかになった。また、服装に関する規定が一切示されていない場合、生徒は服装によって学校のフォーマルな価値規範への姿勢を表すことが出来ないため、スクールカーストとの関連は見られないことも明らかとなった。

最後に、今後の課題と本研究の限界について述べる。今回研究対象としたのは高校でのスクールカーストと制服の着こなしであった。しかし、インタビューでは「スクールカーストが出来てくるのは中学校」という話が多く聞かれた。スクールカーストの成立する時期の人間関係と制服の着こなしについても掘り下げることによって、関連についてより多くのことがわかるのではないだろうか。すでにスクールカーストが成立したあとの時期についてのみ研究対象がとどまったことが、一つめの課題である。もう一つの課題としては、インタビュー対象者の偏りがある。今回、インタビュー対象者は全員私立大学に通う大学生であった。そのためインタビューから得られる情報に偏りがあった可能性がある。

[注]

(1)本稿では聞き手についてはすべて「**」で統一している。

[文献]

- Erving Goffman, 1959, 『The Presentation of Self in Everyday Life』 Anchor Book.
長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志, 2007, 『社会学』 有斐閣
樋田大二郎, 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』 学事出版
石黒毅, 1974, 『行為と演技 日常生活における自己呈示』, 誠信書房
岩城秀夫・耳塚寛明, 1983, 「概説・高校生」『現代のエスプリ 195 高校生』 至文堂
森口朗, 2007, 『いじめの構造』 新潮新書
中川伸俊・渡辺克典, 2015, 『触発するゴフマン やりとりと秩序の社会学』 新曜社
鈴木翔・解説本田由紀, 2012, 『教室内カースト』 光文社新書
衆議院会議録 第165回国会 青少年問題に関する特別委員会 第3号